



五感を使い素敵な表現に —生き生きとした詩の表現ができる子どもたち—

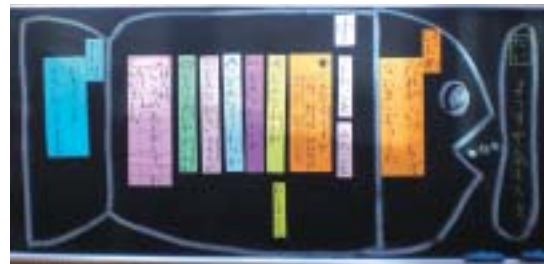
なぎさ公園小学校
教諭 真田 美保

五感を使って

本校では、「ふるえる心を育てる」ところが、4つの柱の1つにあげられています。

それは、子どもたちが、表現することの大切さや喜びを体得し、豊かな表現活動になることをねらいとしています。国語科でいうなら、五感を使い感じたことを詩や作文に表すこと。調べたことを通して自分の考えを論理的に説明文に表すことです。また、物語や詩などから読み取ったことを声や身体で表現する活動「朗読劇など」が考えられます。

では、五感を使うとはどういうことか。目で見える・耳で聴く・鼻でにおう・手や足でさわることを感じた全てを「こころ」で受け止めること。例えば、目を使い「今日の空は、真っ青です。いこまれそう」、鼻を使い、「クチナシの花はあまい香がして大好きなショートケーキみたい」、手や足を使い「なぎさのグラウンドは芝生だからちくちくするよ」などと感じることです。ですから、五感を生き生きとさせるためには、自然に目をむけたり、その中で体を十分に動かし友だちどうしの体と体の接触を増やしたりとさまざまな活動をするとういのです。また、本校のオリジナル教科「不思議」で体験するような、四季折々の行事も学校だけでなく家庭でも大切にしたいものです。



豊かな表現力はどこから

子どもが詩や作文を書くとき、今の気持ちや思い・感じたことにぴったりとくる言葉みつけをすることが一番大切な活動です。そこで、ぴったりとくる言葉はどこからやって来るのかと考えてみました。以下に示します。

豊かな読書経験から

「文章を書く」ためには、優れた文章に学ばなくてはなりません。詳しく読むというのではなく、読み聞かせだけでも子どもたちは物語の魅力に十分に味わっています。たくさんの本を読んだりお話を聞いたりした経験が、不ずと豊かな言葉となって表れてきます。本は言葉の宝庫なのです。小学4年生から中学2年生くらいは飛躍的に国語力が伸びる時期だと言われています。斎藤孝先生は、それを「ゴールデン・エイジ」と呼んでいます。この呼び名は、サッカーの指導にも取り入れられています。運動と同じく、言語、特に母国語教育というのは、吸収力の高い時期に徹底的にやっておくと相当高いレベルに上げられるというのです。

毎日の音読から

私は、以前1年生の担任で国語科の指導に携っていました。子どもたちには、「音読することで、心に言葉をいっぱい貯めようね。そうすると、文を書くとき、そのときの思いや考えにぴったりの言葉を心の引出から選んで出すことができるよ。」とよく声をかけていました。

友だちの作品の相互交流から

どんな詩や作文を書いていいかわからない子どもにとって、友だちの作品ほど頼りになるものはないでしょう。子どもの感性はステキです。子どもは詩人にも作家にもなれます。

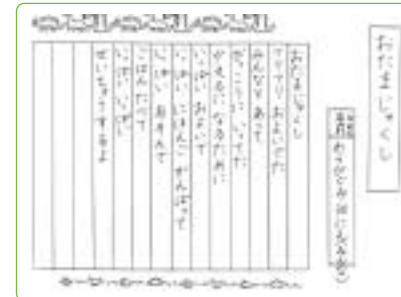
相互交流を通して学び合うとき大切にしていることは、表現の工夫は何かという視点を示すことです。例えば、低学年には「この詩の中から五感を使った言葉を見つけてください。」と。中・高学年になると、「その言葉からどんなことを想像できますか。」を付け加えます。それから、比喩表現に着目してほしいときは、低学年には「(まるで～のようだ)や(～みたい)を見つけてください。」と伝えます。また中・高学年には「その比喩表現によりどんな印象を受けましたか。」を付け加えます。このように、相互交流を学習に取り入れることで、友だちの表現の工夫を見つけ、自分の作品に生かすことができます。

子どもは表現の名人

初めて書いた詩、1年生

1年生の4月、ゲストティチャーに詩の作り方を教わりました。学校の中で1番のお気に入りの場所「ピトーブ」が詩の舞台で、主人公は「おたまじゃくし」です。ゲストティチャーは、「1番好きな場所は?」「ピトーブの中で、どの生き物が好き?」「じゃ、おたまじゃくしは、どんなふう泳いでいるの?」「へえ、おたまじゃくしは何がしたいのかな?」など流れるように発問していきました。子どもたちは、もう夢中になって大好きな生き物の様子を発表しました。そしてい

つづまにか、みんなで作った1つの詩が黒板に出来上がっていました。子どもたちの意識にはありませんが、その詩には、くり返しや体言止め、五感を使った言葉に表現されていました。以下に提示します。



それから、残りの時間に色とりどりの原稿用紙をもらい、わくわくしながらひとり一人が自分なりの詩を書きました。

もっと書きたい

この時間に学んだことがきっかけとなり、クラスには「詩の名人」がどんどん生まれました。子どもたちは休憩時間など少しの時間も惜まず作品を仕上げていきます。5月には、その詩に絵をつけた詩画を作りました。また、なぎさ祭に3クラス全員の作品を展示しました。

子どもの詩画



入学前に読んだ「からすのパンやさん」から生まれた言葉が入っている。



6年生はもっとすごい

続いて担当した6年生の作品を紹介します。1年生の子どもらしい感性もステキですが、それ以上に6年生は瑞々しい感性がキラリと輝いていました。

4月の3回目の授業で書いた詩は、谷川俊太郎さんの詩「生きる」を参考にしました。

生きているということ いま生きているということ

この2文から始まる詩に心を奪われ、子どもたちは自分なりの『生きる』を書きあげました。この詩は箇条書きのようになっていて、一言一言がシンプルに書かれています。こころの中で考えていること、日常の情景などを切り取る作業に大変夢中になりました。



工藤直子さんの「のはらうた」などを載せた手作り音読集から生まれた言葉が入っている。



なぎさらしさ

ここに紹介した詩の表現活動は、本校教育のほんの一部です。五感を刺激し、豊かな表現に変えていく。本校の軸であり、生命線でもあります。6年間で育む「ふるえる心」が、生涯の宝になるはず。

五感を使った体験は、何にも優すぐれた教師なのです。